

随筆

各地の水辺を訪ねる－9

ヴィルヘルムスヘーエの水景（カッセル ドイツ）

亀田 泰武*

1. はじめに

カッセル市（Kassel）はドイツの中央部にあり、人口19万人。メルヘン街道の中にあり、IC特急も止まる。グリム兄弟が長らく居住し、兄弟の博物館がある。丘の斜面にある大規模な人工滝や噴水と宮殿からなる広大なヴィルヘルムスヘーエの水景は駅からそんなに遠くないが、国外では有名でない。

山の公園ヴィルヘルムスヘーエの水景はほかにない特異なものである。夏期には週に2回、水曜日と日曜日に見応えのある噴水ショーが行われる。2012年夏、フランクフルトからベルリン行きの特急に乗った。レールパスでは自由席は乗り放題であるが、混雑が心配だったので座席指定し、1時間半ほどでカッセル・ウイリアムスヘーエ駅に到着した。あまり混まないと思われる水曜に晴れを期待してでかけた。

カッセル駅の切符売り場でトラムの一日券を買うことに。二日券かたと聞かれ一日ですと答えたらまた同じことを聞かれ、繰り返す内にツーデイというのは二日でなく、今日ツデイのことであることが分かった。話が通じにくい外国ではできるだけ広く、内容が重複するくらい話さないといけないのだが、つつい短い言葉ですましがちで、直していかないといけない。

午前中に駅の東3kmのところにあるカールスアウエ公園の池を取材し、トラムに乗って昼前に終点のヴィルヘルムスヘーエ停留所へ。

山の公園は、広くて高低差があるので歩くのが大変である。2013年に亡くなった足の悪かった母親の遺品を整理していたら、カッセルのガイドブックや写真葉書がみつきり、両親もよく行ったものだと感心した。広い公園で、施設が散在していて、カスケードや滝は



八角塔から見た中心市街
公園の軸線が宮殿を通過して幹線道路に続いている

普段水が流れずあまり面白くない。

ベルクパルク・ヴィルヘルムスヘーエ（直訳すると「山の公園ヴィルヘルムスヘーエ」）にはヴィルヘルムスヘーエ宮殿、レーヴェンブルク城、とここの象徴的建造物であるヘラクレスの八角塔がある。限られた撮影条件であったが、幸い天気がよく写真が撮れた。

この山の公園は1700年頃、ヘッセン＝カッセル方伯カールの下でバロック庭園として設けられ、18世紀から19世紀に一部がイギリス式の風景庭園に造り替えられた。八角塔から宮殿を通る軸線はほぼ東西、ほんのちょっと南東に寄り、トラム線路が走る中心市街幹線道路までずっと続いていて、山上からの眺望は見事である。方伯は神聖ローマ帝国での地方領主のようなものと考えればいいらしい。

2. カール一世 （ヘッセン＝カッセル方伯）

ヴィルヘルム6世とその妻であったブランデンブル

* KAMEDA Yasutake, (NPO) 21世紀水倶楽部理事長
URL <http://www.mizumirai.net/sitema/>

ク選帝侯ゲオルク・ヴィルヘルムの娘ヘートヴィヒ・ゾフィーの息子で、カッセルで1654年8月3日に生まれ、1670年に兄のヴィルヘルム7世が死去したことにより、若くしてヘッセン＝カッセル方伯となる。逝去の1730年3月23日までヘッセン＝カッセル方伯として60年間にわたり在位した。

カッセル地方は、1648年まで続いて欧州を疲弊させてしまった三十年戦争後、ドイツ帝国では産業地域より農業地域の方が回復が早かったこと、また迫害されていたフランスのユグノー（プロテスタント）を受け入れ、これらによって経済的な飛躍をとげた。

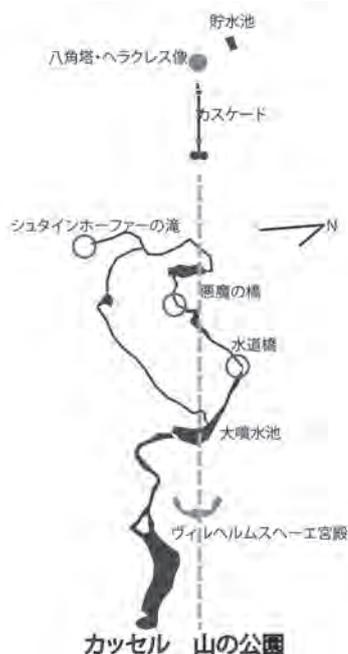
当時の絶対王政下で他の領主達が権威を高める豪華な宮殿建設に邁進していたが、カール一世は大規模庭園の造園に熱心だった。

3. 山の公園構想

カール一世が方伯の継承をした頃、遠くないカールスルーエでは平地にバロック様式の庭園が建設中であった。カッセルの西でも、緩勾配の森林地帯で庭園が造られていた。

カール一世はこれまでにない素晴らしい庭園として丘陵地での水景庭園の造園に思い至ったらしい。はじめにミニスケールモデルのための建物をつくり、これはカール一世が優れた計画者の証のようであった。

この建物は今ないが、カール一世が庭園を街の方向へ、どこまでどう伸ばす気であったかは今日でも好奇心をそそられるものである。



山の公園ヴィルヘルムスヘーエ

1680年代にカール一世は平地の二つの庭園とスロープの庭園の計画と建設を同時にはじめた。最初の作業は配置軸線を定めるため地域を覆っている森林の伐採であった。次に水システムの準備作業が続いた。1696年からは八角の塔となる大きな建築工事がはじまり、1700年には施設が遠くからでも見えるようになった。

1699年から翌年にかけてカール一世はイタリアに旅行した。方伯就任の30年後であった。もっと前に計画されていたが、方伯の継承などによって遅れていた。イタリアではエステ家の別荘やアルドブランディニ (Aldobrandini) 別荘などの庭園や水景を意欲的に勉強した。これが水景計画に多数のアイデアを盛り込むことになる。アルドブランディニ別荘はローマ中心部から南東方向約20kmのところであり、かつて8kmもの水路橋で水を引いてきた水の劇場といわれるものがあったが、二次大戦で米軍の爆撃で破壊され失われてしまい、修復が進んでいない。

カールはこの旅行でイタリア建築家のGiovanni Francesco Guerniero (1665-1745) に会ったと考えられていて、公園の建設に招聘した。

Guernieroは1701年夏に赴任し、当初は水景技術と八角塔の装飾だけが担当であったが、後に全ての建設に関わることになる。

Guernieroは1704年から意欲的な企画を描いた版画制作をはじめた。有名なのが丘の頂上から新宮殿までの水景に関するもので、イタリアの別荘のスタイルであった。計画の細部を描いた版画もつくられた。これによって、工事完成前に計画がよく知られることになった。水の流れの構想と実物は当時センセーショナルなものであった。

建設は次々と進み、1704年までに主要な水景施設と八角塔の下のグロット（洞窟状の飾り）ができあがっていた。1708年に八角塔の上の台座とヘラクレス像の



八角塔の上の台座とヘラクレス像

建設がはじまった。1714年には3つめのカスケードが完成し、カール一世はその記念にメダルを铸造した。

八角塔の上にピラミッドと呼ばれる高い台座とヘラクレスの像を載せることは当初なかったため、建物の強度確保のために改造された。1717年にヘラクレス像が設置され一応の完成を見ることに。

1715年Guernieroは仕事が終了し、ローマの主要水路の一つであるAcqua Feliceの仕事に携わっていたCalro Fontanaの後を継ぐためにイタリアに戻った。

カール一世は1730年に残りの庭園の完成をみることができずに亡くなり、庭園の管理は後継者に受け継がれることになった。

カールの息子であるフリードリッヒ一世またそのあとを継いだヴィルヘルム八世は新たな貢献はしなかったが保存活動は十分に行った。

カール一世の孫であるフリードリッヒ二世（在位1760-1785）になり、庭園の造成は引き継がれた。1763年に7年戦争が終わり亡命生活から戻ったときからはじまり、バロック式から風景庭園へ移行させていった。

庭園中心軸はカール一世時代には手が付けられていなくて、バロック風のライム並木道であった。並木道は宮殿をこえて街まで延びていた。英国で修行したDaniel August Schwarzkopfが参画し、宮殿からカスケードの下まで、風景庭園をつくることに。曲がりくねった園路造成、植物の密生、多数の休憩所や彫像の設置など。またあちこちに多くの空地設け、建物などが見えるようにするなどバロック風の眺望も得られるようにした。

庭園の主なテーマである水景の建設も進み、水路の付け替えも行われた。

フリードリッヒ二世が心臓疾患で亡くなり、あとを継いだ息子のヴィルヘルム9世（在位1785-1821）は新しい計画をはじめた。英国で修行した建築家のHeinrich Christoph Jussouと熟練の庭師のDaniel August Schwarzkopfが従事し、古典的な英国式風景庭園に変えていった。園道や水路網を再編成し、中央軸など基本配置は変わらないもののバロック的な幾何学模様が変わって長いS字状の園路が、主要な施設を結ぶようになった。

水量を増やすために近くの谷からあらたに水を引いたり、公園内に父親がレイアウトした水路網から取水することにした。これによりシュタインホーファーの滝、悪魔の橋の滝、水道橋などに多量の水を供給して見事な景観を形成できるようになった。

Jussouが最初に手がけたのが水道橋（建設期間1788

-1792）であった。ローマ時代に建設された水道橋を摸し、地震によって一部崩れ、滝となって落ちるとともに、脇からも流れ込むという独特な形状であった。

当時噴水は自然的ではないとされていたがヴィルヘルム9世は铸造管専門家であるシュタインホーファー（Karl Steinhöfer）を使い、大噴水池で50m近くまで上げることに成功した。

4. 各施設

4.1 八角塔とヘラクレス像

カール一世が当初考えたカッセルの街を見下ろす標高526mの八角塔の上に、Guernieroによる高さ26mの塔とヘラクレス像が載せられた。庭園のシンボリックな存在である。ヘラクレス像はイタリアのナポリ考古学博物館にあるヘラクレス像のレプリカで、高さ8.3mもあるが高いところにあるので、下からは小さくしか見えない。

八角堂のすぐ北には駐車場があり、自動車で行くことができる。



下から八角堂を見上げる。修復中であった。

日曜と水曜の14:30にグロット下にある滝から水が流れ出し、カスケードに流れていく。

4.2 カスケード

八角塔の下に続いているが流れは中央と両脇の3つある。長さは250mくらいもあり、このような大きなカスケードは見たことがない。中央部分は水量が多く、二十数段もあり、総落差も20mくらいありそうで、各段は落ち口の所で斜めに切られていて、水は薄流となった後、滝となっていた。斜め部分では上は直線、下は円弧状になって、斜面の薄流部分は均等に流れ、滝は立体的に見えるような工夫がされている。両脇のカ

スケードは斜め部分がなく、その分小さい段になっていて、段数は中央部分の2倍ある。カスケードは2箇所の水たまりがあり、デザインとして3等分されている



カスケードの流れ1
まわりは人でいっぱい

水は上の段から流れていくが、最下段まで来るのに相当時間がかかっていた。カスケードのまわりには多数の見物客がいて、ふざけて水が来る直前に横切ったりしていた。



カスケードの流れ2
最下段まで水が到達

カスケードの最下段は大きな落差となっていて、裏にグロットがある。

4.3 シュタインホーファーの滝

1790年代鑄造管の専門家であるシュタインホーファーがいくつもの滝を持つ水景をつくった。この滝はアルプスの山中の自然をイメージしたもので、当時の自然を愛する流行に合っていた。



シュタインホーファーの滝。
まわりは人でいっぱい写真を撮るのが難しかった。

カスケード見物の後、歩いて滝の麓にむかい、3時頃から流れ出す。

岩の崖所々から水が流れ出すようになっていて、はじめは少ないが、だんだん増えていって、そのうちに園路際の小さい水路から溢れるばかりになる。

4.4 悪魔の橋

橋の下の滝はJussowによるもので、これもアルプスの自然を念頭につくられ、大量の水による威力を見せている。滝の上に架かる10mの橋は昔木製であったが、1826年にネオゴシック様式の鑄鉄製に変わった。滝が流れ出すのは15:10頃である。



悪魔の橋と滝

悪魔の橋の滝から流れた水は二手に分かれ、水道橋と貯水池に向かう。水道橋への流れは移動する園路沿いに走っている。



水道橋に流れていく水路
これもけっこうな水量

4.5 水道橋

Jussouにより1788年から1792年にかけてつくられた、14のアーチを持つ水道橋遺跡の形をしている。水道橋は最高地点のところにある壊れた監視塔で二つに分かれ、片方から水が30mの滝となって落ちている。もう一方は数メートルの長さしかない。水は滝からだけでなく崩れ落ちた水道橋の廃墟のようなところからも流れ出ている、地震で壊された廃墟のような景観を演出している。このローマ時代の古典的なものに対するあこがれの流行を示している。



水道橋からの滝
右側の廃墟からも流れている

水道橋から滝が流れ出すのが15：20頃で、その後大噴水地に流れていくが途中に小規模なカスケードがある。

4.6 大噴水池

池はヴィリアムスヘーエ宮殿の北広場、公園主軸の

線上にある。噴水はシュタインホーファーの鋳鉄管技術を使った大規模なもので、悪魔の橋の下の悪魔の池との80mの落差を生かして43mの高さに水を噴き上げるものであった。噴水のスタイルは自然の間欠泉を模している。

後にシュタインホーファーの弟カールがもっと高いところに貯水池をつくり、50mの噴水高となった。

大噴水池に水が吹き上がるのは15：30頃である。



大噴水
水景巡りの最後。圧巻である。

4.7 ヴィリアムスヘーエ宮殿

宮殿の場所は以前には修道院が建てられたり、ルネッサンス式の宮殿があったりした。今日の建物は南翼、北翼、中央翼で構成される。南翼は1786年に宮殿として、ユグノー建築家のDu Rysが担当し、その後三代にわたって宮殿建設に従事した。次に北翼が教会としてつくられた。

両翼をつなぐ中央翼は様々な案があったがJussouの提案に落ち着き、1829年に今の姿になった。二次大戦後



ヴィリアムスヘーエ宮殿
東側から見上げたところ。



公園から続く軸線の幹線道路
トラムも走っている



普段のカスケード
のぼるのが大変なくらい高い

古代彫刻や古典美術を展示する美術館となっている。

5. 終わりに

公園内は広くて、移動が大変である。トラム駅から宮殿まで約500m、宮殿から大噴水池まで250m、そこから大カスケード下の池まで900m、いずれも直線距離で、勾配のあるけっこう曲がっている道なのでもっと長く、高低差があるので歩きにくいこととなる。

水景ショーの際、観客は時間に従い上から降りていくが、水の流れは大噴水の水源が悪魔の橋下流の池より高いなどもっと複雑になっていて、よく分からない。取水ルートも今回調べられなかった。水を流すのが週2回しかないのは、確保できる水量が少ないからと思われるが、現代技術で毎日流すようにするともっと親しみやすくなるような気がする。

公園内には説明したほか、レーヴェンブルグ城、大温室、バラの島、四阿、中国風建物、いくつもの滝



普段の水道橋
左に別れた水道橋端から滝となって落ちる

などがある。

これまで紹介したみごとな水景庭園建設の推進者は、けっこうその姿を見ることなく世を去っているが、素晴らしい水景庭園造成を目指したカール一世は在位が60年と長かったため、八角堂や大規模なカスケードのできあがるのを見ることができた。

ただ立地のポテンシャルから、その下にも高低差を利用した水景施設が建設可能で、ここにどんな夢を持っていたのだろうか。実際には子孫によって、当初のゴシック的なものでない、英国式風景庭園、自然的やローマ懐古的な水景施設がつけられた。人工的な水景施設で自然景観のような演出をしているところは他になく、独特なものである。

ミュンヘンにあるニンフェンブルグ城も当初フランス式の幾何学的デザインであったが、18世紀末に選帝侯マックス1世が英国式風景庭園として大改造している。この際カスケードや直線的な池は残している。

これらのことから18世紀後半に、英国式の庭造りがドイツに多大な影響を及ぼしたことがわかる。

高低差をうまく利用している点で、海岸段丘を利用したサンクトペテルブルグのペテルゴフと似ている。大きな高低差を利用できるので、噴水がペテルゴフやヴェルサイユのように華やかなものとして作られていたらどんなものになっていただろうか。

参考

wilhelmshöhe park MHK ISBN 978-3-7954-2832-7